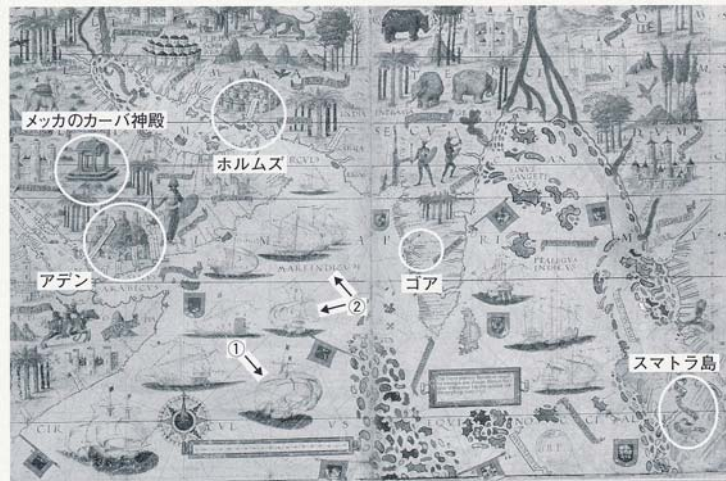


Die lapsi pognitur beculicis obque
tor nantiga que clausis ferros nati
leat continue harum uiculae an
theopshigi sunt

1519年ころのポルトガルの海図



十字軍以来、ヨーロッパではアジアへの関心が高まり、その産物、特に香料をイスラーム教徒の手を介さずに入手するための新航路を開発することが求められた。この事業にまず着手したのは、いち早くイスラーム教徒を駆逐し、中央集権化を達成したポルトガルであった。15世紀初頭からポルトガル船団による探検が繰り返された結果、1498年にヴァスコ＝ダ＝ガマがインドに到達することに成功する。さらにポルトガルのインド総督アルブケルケは1510年にゴア、1511年にマラッカを占拠し、インド洋の香料貿易の独占を図った。

ヨーロッパ諸国が盛んに海外へ進出した大航海時代には、地中海で発達した実用的な海図に地理的発見の成果を増補した海図が次々に製作された。フランスのパリ国立図書館が19世紀末に入手した「ミレールの地図集」に含まれる本図もそうした海図の1つである。この海図集は、地中海、大西洋、ヨーロッパ北部、アソーレス諸島、ブラジル、マダ

ガスカル、「中国の大湾」、そしてここに掲げたインド洋の計8枚で構成されている。6枚の羊皮紙に描かれたこれらの彩色海図は、当初ポルトガルの海図製作者として著名なペドロ＝レイネル、ジョルジュ＝レイネル父子の作と考えられた。しかしその後ポルトガルの地図製作者ロポ＝オーメンが1519年に製作した世界図との関連が指摘され、またフランドル出身の画家アントニオ＝デオランダが装飾に携わったことも明らかにされ、現在では彼らとレイネル父子による1519年ころの合作と考えられるようになっている。

大航海時代のヨーロッパでは、ルネサンスの中で復活したプトレマイオスの著書『地理学』に基づく世界図が権威を持つようになっていた。この世界図は地中海周辺の地理については正確であったが、アフリカ大陸の南部が東に湾曲してアジアにつながり、インド亜大陸の代わりに巨大な島が描かれるなど、インド洋の地勢は不正確なものであった。本図からは、当時のポルトガル人がプトレマイオス世界図の影響を脱し、スマトラ島以西のインド洋周縁地域の形状について概ね正確な情報を入手していたことを確認できる。

本図が制作された1510年代に、インド西岸のゴアを拠点としたポルトガル人は香料貿易を独占するために紅海とペルシア湾の制圧を試み、またイスラーム教の聖地メッカを攻撃することを構想していた。彼らの関心を反映して、本図にはペルシア湾口のホルムズや紅海の入りに近いアラビア半島南部の要衝アデンの城砦、そしてメッカのカーバ神殿が描かれている。また海では十字架をつけたポルトガル人の船①と三日月をつけたイスラーム教徒の船②が対峙し、当時のこの海域における両者の緊張状態を物語っている。

このように本図は大航海時代におけるヨーロッパ人の地理的知識の拡大と、ポルトガル人とイスラーム教徒とのインド洋での対立の様子を伝える貴重な同時代史料と言える。

(石川博樹〈日本学術振興会特別研究員〉)